

王寅について

——来舶画人研究——

鶴田武良

幕末の長崎には、太平天国の戦乱を逃れてきた華人が少からずいた。今日、来舶画人として名を遺している王克三、徐雨亭もそうである。明治の初期にも、十五年にわたった動乱の余燼の残る中国から、少からぬ文人が安穩を求めて日本に渡航してきた。そのひとりが王治梅である。

画人治梅王寅の名を日本に伝えたのは、恐らく岡田篁所（一八二〇）が最初であろう。長崎の儒医岡田篁所は来崎中の蘇州人湯韻梅、友人松浦永寿とともに、明治五年二月十三日長崎を解纜して上海、蘇州に遊び、同年四月十三日、長崎に帰港したが、その間の見聞を「滬吳日記」にのこしている。同書は、元治元年（一八六四）国禁を犯して上海に渡り、同地で売画生活を送っていた安田老山・紅楓夫妻の消息や、金弼^{註1}、王克三、胡公寿など来舶画人についても伝えるところがあり、同治年間末の上海の状況を知る上に重要な史料であるが、中に王治梅の名前がみえる。篁所は上海到着の翌十六日、松浦永寿と共に日本領事館に旧知の領事品川忠道、三等書記生神代延長^{註2}を訪ねて、上海の書画家の作品の眼福を得たが、その中に王治梅の花卉図があった。

十六日晴 朝與永壽、之日本公館。見品川・神代二氏。二人皆與余相識。神代氏號渭川、出上海（註・上海）人書畫見示。即記其姓號。曰王治梅^花、陳榮^山、朱夢廬^花、吳子書^花、任栢年^花、胡公壽^山、張子祥^花、謝烈聲^山、馬復鏞^書、吳鞠潭^書、陳元升^山、雨香^物、頂謹^書、潘韻卿^書以上數名、現在上洋、以書畫名者。

半月後の三月一日、永寿と一緒に安田老山を訪ねて、上海で高名な書画家の名を聞いたが、その中にもまた王治梅の名があった。

三月朔 熱七十三度

朝與永壽同、訪老山。永壽携提籃煮茶共品。紅楓作骨董飯、供我輩。老山出示寧波諸人所寄尺牘詩賦。老山曰、上海現今書畫有名者、朱夢廬、楊柳谷、楊佩甫、趙嘉生、鄧鐵仙、胡公壽、任栢年、張子祥、陸靜濤、王道、管琴舫、王治梅、以上十二名。俱住上海、以書畫爲業者。

なお、篁所は二月二十五日、張子祥を訪問し、秋海棠図を贈られ、同三十日には胡公寿を訪ねて喬柯竹石図を描いて贈られているが、上海で王治梅に面識を得た様子はない。

ところで、王治梅の経歴について、最も詳しいのは、古賀十二郎氏稿本「長崎画史彙伝」^{註3}に引く光緒十八年壬辰（明治二十五年）の「治梅王先生小伝」であろう。同書の原文は、当然、中国文であったと考えられるが、今、その所在を知らないのです、古賀氏稿本に掲げる通りを次に引いておく。なお、かなづかいを改めた。

王氏、名は寅、字は治梅。金陵の世族であった。幼時、父に侍して、読書を学び、聡穎常に越えていたと云う。咸豐三癸丑年（一八五三）二月、賊徒、金陵を破りしため、王氏は、両親を奉じ、弟妹を伴い、居を六合（江蘇省江寧）に避けた。当時、烽烟相望み、太だ糊口に苦しむので、詩書を棄て、専ら絵事を習う事にした。幾何もなく、六合も亦陥落した。それで、王氏親子は江南の棲霞山の麓に避難した。既にして、金陵城外の大營は、完く堅固になり、民は漸く暫安を得るに至った。

咸豐九己未年（一八五九）秋、王氏の父は病を得、旬余にして、竟に起たず、千古の人となつて了った。それで、王氏は、柩を扶けて故郷に帰り、祖塋に之を葬った。

咸豐十庚申年（一八六〇）粵匪復た猖獗し、一夜、賊徒が棲霞を襲撃したので、王氏は母を扶け、弟妹と共に逃れた。会ま賊徒大いに至り、遂に老母弟妹と先後して相失い、自己は賊徒のために頂後を刺されて、瀝血、衣に満ちしと云う。翌朝、賊徒退き、幸に郷人に救われ、百日の後、創も略ぼ愈うるに至ったので、老母と弟妹を尋ね探しつつ、興化の界まできてみると、偶爾その弟に邂逅し、母も弟妹も皆な病歿し、之を興化城に葬りたる事を聞き、弟と俱に、墳前に詣で、墓側の荒刹中に暫く留り、それより阜陵に赴きしが、未だ幾くもなくして、阜陵も亦陥つたので、遂に上海に至り、絵事を以て業となす事にした。

其頃、上海に渡れる日本人などは、王氏の画を見て、之を奇とし、先を争うて王氏の画を購ひ索めた。是に於て、王氏の名声は一時に震い、長崎に於ては、有志の人々が、王氏に來遊を請うことになった。

王氏は、意外にも長崎に知己を得て、深く感激し、心を決して長崎に遊び、淹留数年にして唐山へ帰った。その日本に寓するや、蘭、竹、石、人物等の譜、数帙を著し、得る所の潤筆料は三、四千金に下らざりしと云う。

光緒十五己丑年（一八八九）、忽ち腿疾を得、行歴に苦しみしが、光緒十七辛卯年（一八九一）に至りて、少しく痊を覚ゆるやうになった。是に於て、更に梅譜を著した。

一方、中国の画史では、編者楊逸の自序に、己未（民国八年一九一九年）の年記をもつ「海上墨林」巻三に

王治梅、名寅、以字行、上元人。山水蘭竹写意人物別饒意致、尤工写照。有画譜、行世。

と、極めて簡略な伝を載せるが、日本客遊についてはふれない。近人呉心穀編「歴代画史彙伝補編」巻二には、やや詳しく、日本流寓についても記している。

王寅、字治梅、以字行。上元人。山水不泥一格、摹仿尤長。筆力沈着、氣韻宣爽、為一時能手、写意人物別饒意致、又工伝神及蘭竹、曾遊東瀛數載、帰後寓滬、名益盛、有画譜、行世。

右に挙げた三書によつて、王寅は江蘇省江寧県の人、字の治梅で行われ、山水、人物、写照（肖像画）、蘭竹を善くしたこと、日本に数年、流寓したことなどが知られる。さらにその著「蘭竹譜」の自序によると、父静夫も学問の余暇に絵事を嗜み、ことに画蘭竹石にすぐれ、晩年には古人の神髄を得ていたというから、王治梅の絵事も、その父の影響するところが少くなかったことと考えられる。

古賀氏稿本「長崎画史彙伝」に記すように、王治梅にとって、日本客遊は大きな転機であったと考えられるが、王寅の日本渡航の経緯につい

大阪 橋本末吉氏蔵

挿図1 王寅筆 平林煙雨図

ては、古賀氏稿本に見える以外のことは、今は知り難い。推測すれば、岡田篁所も来日に与ったひとりではなかったかと考えられるが、先に記したように、上海で王治梅に面識を得た様子はないから、それも臆測の域を出ない。

王治梅の来日は、明治二十二年、上海に渡った京都の鳩居堂主熊谷古香に贈った「平林煙雨図」

(挿図1)の賛に

前十有二年、余遊日本

京都、深荷

古香熊谷先生適館授餐

欸待殷勤中心銘感無

日忘之、今

先生来遊申江、欽然道

旧不勝欣慰、臨別檢

所藏画成小額奉贈

以誌彼此交情耐久不

渝之意

光緒十五年小春下浣

治梅弟王寅又記(白文「王寅」)

とあることによって、光緒三年(一八七七)即ち明治十年であったことが分る。さらに「篤義行樂図」(図版I、II)の款記によって、光緒三年二月中旬にはまだ上海に在ったこと、つまり、来舶がそれ以後であったことが知られる。恐らく最初の来日であったであろう。

光緒三年の来日が最初であったと考えられるが、款記に同年、日本で画いたと記す作品は、管見の限りではまだ見ない。この時は滞在一年余りで病を得、翌光緒四年(明治十一年)四月二十六日、長崎を出港、帰国したことが、たまたま同船した南画家長尾無墨(一八九四)の「滬遊雜詩」にみえる。長尾無墨は明治十一年四月二十六日、長崎を出帆して上海に渡り、胡公寿、馮耕三、張子祥などと交遊を結び、帰国後、旅中に得た詩を「滬遊雜詩」二巻に編んだ。その巻下の巻首に無墨は、王治梅が大きな方形の提籃を背にして、書物を手に持っている図を描いて載せ、図の上に王治梅が七言律詩一首を寄せている。

因疾歸來挽不留 同舟幸遇一詩流

雄談高唱蛟龍窟 萬里鯨波賦詠遊

航海變輪任去留 濁流纔過又清流

如山波浪兼天湧 今日乘風遂壯遊

光緒四年夏四月廿有六日、自日本崎陽島航海歸國、舟中晤無墨先生、胸襟磊

落、言辭慷慨、一見如舊相識、終日暢談、詩酒唱和、幾忘身在滄海風濤中、醉

後奉和瑤韻錄、請斧正、

上元王治梅(朱文「王寅」)

なお、同書巻下には、無墨の「画師王治梅、因病帰国、自長崎同舟、詩酒唱和、交情極密、賦一絶以示」す七言絶句及び「留別王治梅」の七言

絶句各一首を収める。

この時の病気は、帰国後、間もなく快癒したようで、同光緒四年（明治十一年）七月には再び来日し、京都の鳩居堂に寄寓していたことが、岡本黄石（一八九八）の「黄石齋集」第五集所載の王治梅の長詩に次韻した黄石の詩の序によって知られる。

戊寅七月、清国画史王治梅入京、寓於鳩居堂、一日主人拉治梅遊鴨沂水亭、招飲都下諸名流、席上治梅作長篇、次其韵、贈治梅、兼似主人。

東京 林 宗毅氏藏

王治梅は半年余りを京都で過したのち、翌明治十二年春には長崎に下っていたことが、岡田篁所の「脩竹楼坐右日記」^{註6}に見える。

己卯（明治十二年）三月六日

王治梅、銭子琴、馮耕三、張子舫来。

三月廿日晴

昨王治梅作枯木寒鴉図見贈并五律一篇。

三月廿二日雨

同湘颿先生趣博覧会。

觀王治梅作画。

そうして約二ヶ月後、第二回の来日も滞留一

挿図2 王寅筆 山水花鳥画冊から

年足らずで帰国したことが同日記の五月十四日条に記されている。

王治梅、先此十三日上海へ帰ル。馮耕三ハ其以前十日帰ル。銭子琴、一昨日横浜ニ赴ク。

この第二回目の来日も売画が目的であったと考えられ、「脩竹楼坐右日記」に記されているように、少からぬ作品を遺したにちがいないが、光緒四年から同五年夏にかけての年記を持つ現存作品は極めて少い。第十四開「雲根図」の款記に

（光緒四年）
戊寅秋日 天朗氣清、涼風入坐、焚香写此、用以陶冶性情、消遣岑寂、金陵冶梅王寅客於京都鳩居堂一塵不和処。

と記す「山水花鳥画冊」（挿図2・3）は、日本での制作の明らかな、最も早い時期の作品のひとつであるだけでなく、主題が山水から花卉、花鳥、魚類にまで及んでいて、王治梅の画域の広さを証する上でも珍しい作品である。

第三回目の来日は、ほぼ一ヶ月をおいて、同じ光緒五年（明治十二年）夏であったことが、治梅画譜「歴代名公真蹟縮本」に寄せた加島信成の序によって知ることができる。

治梅王君中華金陵逸士也
善繪事、益精吟詠、所畫
山水人物幽禽異卉無不
至其妙、而筆意磊落、絕俗
非庸史所能及也、我國耳名
久矣。今年仲夏余遊京師
寓於鳩居堂、而君亦來寓、主人
出所藏之名人墨蹟畫片、今
君恣意覽觀、君又與都下

諸名流或遊、鑑賞其收藏、毎

遇眞蹟、極力模擬、駁

駁乎追踪

作者一略一

明治十二年歲次辛卯十

二月

日本麥洲加島信成

撰并書

仲夏は太陰曆五月にあ

たり、「脩竹楼日記」

五月十四日条の「王治

梅、先此十三日上海へ

帰ル」という記載と矛

盾するようであるが、

岡田篁所は「五月」と

記していることから、

恐らく太陽曆を用いた

もので、五月十三日は太陰曆四月二十三日に当る。加島信成の「仲夏」

は、太陰曆に由ったものであらう。明治十二年の太陰曆仲夏五月は、太

陽曆の五月二十一日から六月十九日まで^{註7}に相当し、「五月十三日、上海

へ帰ル」という記事と齟齬をきたさない。

光緒五年（明治十二年）夏の三回目の来日以後、王治梅は主として、京

都、大阪に客遊した。闕名氏の「日本紀遊」^{註8}は、光緒六年三月二十六

日、三菱商船の高砂丸で上海を出港、同二十九日長崎入港、海路神戸、

横浜を経て東京に遊び、再び同じ航程をとって五月十一日、上海に帰港した中国人の日本見聞記であるが、その中に、当時、大阪、京都で書画を売ってくらしていた華人の名が見える。

四月初三日庚子、鼎泰號友朱季方與常熟衛鑄生、名金、來候、鑄生工書法、客遊於此者一略一是夜宿大阪

初四日辛丑、早飯後與胡小蘋同乘輪車、至西京一略一至上京第三十一組河原町

三條上下丸屋町松村屋客寓、會浙江慈谿人馮濤、號雪卿、以工書客此。一略一

是夜宿松村屋客寓、樓上室無卓椅、地有絨氈、坐臥皆於是、而屋宇修潔、無纖

塵。同寓有江甯人王治梅、鄰寓有嘉興陳曼壽、皆以工書善畫客遊於此、中國人

之寓日本西京者祇此馮・王・陳三人而已。

王治梅は売画の傍ら、京阪の文人と風雅の交遊を結び、詩酒の応酬を

していた。例えば、明治十三年冬には、漢学者藤沢南岳^{註9}（一八四〇—）に招か

れて、大阪天王寺茶臼山の観楓閣で詩の応酬をしている。しかし、漢詩

文の盛んであった明治前期においては、王治梅の詩は、その画に数等劣

るとする^{註10}のが大方の評であったようである。

王治梅の日本での制作が明らかな作品は、管見の限りでは、本稿末に

掲げるように、前掲の光緒四年（明治十一年）秋の「山水花鳥図冊」を最

初とし、光緒十年（明治十七年）十二月の「江山泛舟図」^{註11}を最後とする。

現存作品の年記によると、第三回目の来日は、光緒十一年（明治十八年）

に終わったと推測される。遅くとも、光緒十五年には帰国して上海に在っ

たことが、同年春、上海に遊んだ鳩居堂主熊谷古香に贈った「平林煙雨

図」の前引の賛によって明らかである。しかし光緒十二年（明治十九年）

二月の年記をもつ「楚山煙雨図巻」^{註12}も日本での制作である可能性がある

が、それを証することは、今、できない。

挿図3 王寅筆 山水花鳥画冊から

王治梅は日本での生計を主に売画に依っていたから、京阪を中心に現在もかなり多数の作品が遺されていることと考えられ、今後の作品の発見によって日本滞在上、下限、ことに下限は広がる可能性がある。

王治梅の画業は、「歴代画史彙編補編」に記すように、山水、蘭竹から人物、肖像に及び多岐にわたっているが、中でも米法を基本にした煙雨山水の景に長じた。また雲根図を得意とし、後に「石譜」を著わし、「王石顛」「石顛」などの印を用いている。現存作品も、画史の述べるように、多様であるが、ただ、その肖像画については、今日までほとんど知るところがなかった。掲出の「篤義行楽図」(図版Ⅰ・Ⅱ)は、山水画でもあるが、むしろ肖像画としての性格のより大きい作品であり、従来、知られることのなかった王治梅の肖像画家としての技量と、清末における西洋画の影響をうけた肖像画とを示す重要な作例といえよう。図上の賛は

君之高祖、明之名臣、傳家忠孝、

註13

七世縉紳、君有經術、行無庇

癭、名揚日本、詔使中華、不辱

君命、胆勉從公、中外感頌、如坐

春風、離歌驟唱、官民潛然、余

圖君貌、如畫凌煙

秋江先生奉命來領事申江、政治

日新、官民感頌、公餘之暇、吟詩

讀書、博雅好古、中國文章言語、

無不精通、與余訂金石交、結翰

墨緣、今將錦施、敬寫玉照、補

以松柏堅貞、蘭桂騰芳圖並題

俚句、以誌別忱

光緒三年二月中旬 王治梅寫(朱文「治梅」)

秋江は、寛文十二年(一六七二)、長崎在住御免の許可を得た^{註14}投化唐人魏之琰(二六八七)を祖とし、代々唐通事を勤めた鉅鹿氏第八代鉅鹿篤義(二八三〇)の号である。外務省外交史料館所蔵「職員並履歴ニ関スル各片往復書」第一巻に、明治十年二月八日付で大蔵省翻訳課から外務省に宛てて、海外派出館員の官職姓名を問うた往復文書があるが、その回答書に

二等書記生

上海領事館 鉅鹿篤義

の名が見える。同「往復書」には、また、明治元年(一八六八)から同十年(一八七七)七月九日退官までの鉅鹿篤義の詳細な職歴の写しがある。それによると、鉅鹿篤義は明治八年九月十八日外務四等書記生に任じ、同日付で清国天津領事館勤務となり、明治九年六月六日、清国上海領事館に転勤、同年七月一日、外務二等書記生に昇任、同年十一月十四日、帰願を申出て、翌明治十年七月九日、依願退職を許されている。「篤義行楽図」は、王治梅の賛によると、光緒三年(明治十年)二月、鉅鹿篤義の帰国に当って餞として描いて贈ったものであるから、帰国はこの図が成ってから、そう遠くない時期であったことと推測される。

「篤義行楽図」は、先にも述べたように、山水画でもあるが、肖像画としての一面がよりつよい。

王治梅の山水画は、「平林煙雨図」(挿図Ⅰ)に見られるように、米法を基本にして湿潤な風景を書き、土坡、樹木も柔潤な筆致で書き上げていくものが多い。そのような中で、「篤義行楽図」は岩の皴法、輪郭、

樹法ともに硬い筆致で、全体として謹直な筆法である。現存する王治梅の作品の中でも珍しい作柄といえよう。画面下方、中央の卓状の岩に左腕を載せて座っているのが鉅鹿篤義であろう。右側に立つ二人の侍童は、ひとりには仏手柑を捧げ持ち、ひとりは丹桂の一枝を手をしている。

本図で重要なのは、三人の人物、ことに鉅鹿篤義の風貌の描法である。鉅鹿篤義の右に控える二人の侍童の顔貌は、中国の伝統的な肖像画法に、やや西洋画風の陰影法を加味して描いている。目蓋、鼻梁、唇に副うわずかな陰影がそうである。衣服の表現はごく簡略であり、侍童の手の描法は、容貌の表現に比べてかなり粗略といえよう。鉅鹿篤義の顔貌の表現は、二人の侍童よりも、いっそう西洋画法に近く、額のしわ、目蓋、鼻梁に副うて陰影をほどこし、頬にも陰影をつけて、写実性を高めている。

西洋絵画の中国伝入は、明の嘉靖年間(一五二二—一五六六)ポルトガル貿易とともに始ったと考えられるが、中国画と西洋画との相違に中国人が気付いたのは、万暦九年(一五八二)、イタリアのイエズス会士マテオ・リッチ(中国名・利瑪竇、一五五二—一六〇一)が中国に将来した聖母子やキリストの画像によってである。マテオ・リッチ将来の聖母子像を見た顧起元は聖母と幼キリストのからだや手、腕が円く盛上っていて、顔の凹凸が生きている人を見るのと同じであるのに驚き、その理由を問うた。利瑪竇はそれに答えて、中国画はただ陽を画くだけで陰を画かないから、人の顔は平面的で立体感が表現されない。西洋画は陰と陽とを写すから、顔の凹凸、手や腕の円味が表現される、と述べている。^{註15}

マテオ・リッチが指摘しているように、西洋画が中国画と異なる最も

大きな点は、陰を画くことであり、両者の相異は、人物画において、より顕著であったといえよう。中国人がはじめて西洋画に驚いたのはその人物画であり、また、最初に西洋画法を取入れたのも、人物画、ことに肖像画においてであった。中国における西洋画風の陰影をもつ肖像画は、明末の曾鯨(一五六七—一六〇一)に始まると考えられるが、曾鯨の代表的な肖像画と考えられる「黃道周像」(某家藏)は、顔の凹凸に副うて細筆を重ねて陰影を描き上げている。西洋画の陰影法を、いわば、中国画の伝統である筆描を通して中国化したものである。西洋画風の陰影法を用いた人物画は、乾隆の粉彩には数多く見られるが、絵画にはそのような例は見当たらないようである。

王治梅筆「篤義行楽図」の鉅鹿篤義の顔貌描写は、曾鯨の肖像画法とはちがって、陰影を面的に表現していて、西洋画法により接近したものだといえよう。清末の上海には、西洋画風の陰影法をかなり上手に消化した人物肖像画が行われていたことは任熊(一八二〇—一八六四)の「自画像」^{註16}によって証明することができる。王治梅も、西洋人物画風の肖像画をよくしたひとりで、彼が開港地上海で画名を得たのは、その肖像画に負うところが大きかったのではあるまいか。中国の画史が、王治梅を肖像画家としてより重くみているのに、日本に肖像画家乃至人物画家としての名が遺らなかったのは、日本では中国画乃至文人画即山水画とする風潮が江戸時代以来強く、従って来舶の華人画家に人物肖像画を求めることはほとんどなかったであろうし、また、中国から、その人物肖像画が将来されることもなかったためと考えられる。

王治梅は第三回目の来日から半年後の明治十二年末に「歴代名公真蹟縮本」を編纂し、翌明治十三年には「治梅石譜」、さらに翌々明治十五年には「治梅蘭竹譜」を編んでいる。それらについて、ここで合せて簡単に記しておきたい。

「歴代名公真蹟縮本」は全四冊。袋綴。各冊とも縦一三・八センチ、横八・六センチの袖珍版。図は各頁ともに縦一〇・五センチ、横六・五センチの枠内に入れる。帙の題簽は、

歴代名公真蹟縮本 壬午、癸月
曼壽

第一冊の扉には

治梅畫譜

歴代名公真蹟縮本

東壁山房藏板

と記す。次に明治十二年十二月の菱洲加島信成の序二丁、光緒五年（明治十二年）冬十二月の王治梅の自序二丁、目次一丁があり、さらに「煙霞淡泊」の題字があつて、そのウラから第一巻の図が始まる。巻一に収める画家は、鄭虔、王維、郭忠恕、趙子昂、黃子久、吳仲圭、王叔明、倪雲林、錢舜拳、陶孟学、王孟端、孫竜、陳暹、吳振、馬扶義、陸遵書、陸雲錦、沈宗騫、陳嘉言、潘志省、顧鼎銓、沈士充、魯治、方鈞、瞿應紹、董邦達、曹有光、張莘、文伯仁、王学浩の三十名、三十一丁。右頁に縮図、左頁に略伝を記す。扇面は見開き両頁にわたって図を載せ、伝を上方に置く。第一冊は計三十七丁。

巻二は目次一丁、縮図三十一丁。収める画家は謝時臣、張金、高寛、查士標、朱軒、馮仙湜、陸治、黃璧、朱虚、釈上睿、藍孟、閨秀馬筌、

目存、張崇益、陳煥、唐俊、陳淳、吳歷、王逢元、朱昂之、蔣煜、楊琛、馬世俊、鮑濟、鍾期、沈銓、周岱、黃宸、成誥、許通の三十名。

巻三は目次一丁、縮図二十八丁。画家は胡世榮、陸宣、王三錫、錢穀、上官周、趙璧、徐渭、朱朴、吳亮、周裕度、陳子和、何適、閨秀馮坤生、藍瑛、唐寅、沈仕、馬守貞、張庚、鄒一桂、戴明説、謝仲、閨秀李因、嚴賓、王翬、董其昌、陳謙、吳達の二十七名。

巻四は目次一丁、縮図二十六丁、奥付一丁。画家は吳偉業、聞人益、華岳、楊補、王玖、盛茂燁、沈碩、惲寿平、趙甸、尤求、龔賢、陳政、胡宗仁、奚岡、辺寿民、李流芳、蕭雲從、改琦、陳元素、姜漁、趙左、秦儀、姚元白、陳和、湯謙の二十五名。

奥付には

明治十六年五月十七日御届

同 年十二月二十日出版

とあり、編輯人は上海王寅、出版人は大阪府下寄留加島信成、発兌人は大阪吉岡平助、上海法大馬路東壁山房。

本書刊行の経緯は、先に一部分を引いた加島信成の序文及び王治梅の自序によると、明治十二年夏、王治梅が寄寓先の京都鳩居堂主及び京都の知名士収蔵の名画墨蹟を見る毎に縮摹し、あるいは「西洋照相」の法を按じて縮臨し編纂したものであるという。収録の画家には、今日の中国絵画観からは遠い名もあつて、明治前期における京阪地方の中国絵画収蔵の一端を窺うことのできる資料でもある。縮図は、巻三陸宣の図に、「此幅元本模糊、王治梅後摹於浪花」と註記しているように、王治梅が縮摹し、略伝も治梅が書いたものと考えられる。

「治梅石譜」は一帙二冊。袋綴。縦二六・七センチ、横十五センチ。各頁とも縦十九センチ、横十二センチの枠をとり、その中に文、図を収める。帙題簽には

治梅石譜 庚辰仲冬
曼壽題簽

とある。上冊は表紙の次にあそびの一丁があり、扉には

治梅石譜

と題し、扉見返しには枠の中に

光緒庚辰歲冬十月

金陵王氏雕于浪華

と記してある。次に光緒六年涂月中旬の陳鴻誥の序二丁、同じく庚辰冬日の葉松石の序三丁、庚辰年冬月の世侄汪松坪の序二丁、明治十四年首月の藤沢南岳の序二丁、王治梅の自序二丁、次に目次一丁、寿道人の題字一丁（ウラ白）があり、次から図三十二丁が続く。各丁ともオモテに図、ウラに題贊を記す。最後に江馬欽、福原周峰の跋一丁がある。

下冊は全図ともに横位置とする。扉に「横雲」の題字があり、扉見返しに王治梅の贊がある。図は三十三図、三十三丁。終りに門弟九富鼎の跋一丁がある。裏表紙見返しは

明治十四年三月五日御願

同 三月廿八日版權免許

校正兼

九富 鼎

出版人

發兌人

倉沢 証七

剗刷工

久我金次郎

各図とも水墨套印。陳鴻誥、汪松坪の序、及び王治梅の自序によると、

王寅 についで

王治梅は平生、石を好んで奇石、珍石を見る毎に写し、一石毎に一詩を題していたところ、「宣和石譜」と同じ六十五石となったので、それを剗刷に付したという。明治前期の煎茶流行の中で、単に絵画教科書としてではなく、文房清玩のひとつとして、その板刻は広く愛好されたものと推測される。

「治梅蘭竹譜」は上冊を蘭譜、下冊を竹譜に当てる。各一冊。蘭譜の表紙題簽は

治梅蘭譜 壬午孟春
曼壽

袋綴。縦二十七センチ、横一五センチ。各頁とも中に縦一八・九センチ、横一二・三センチの枠をとり、その中に図を納める。扉にはただ「蘭譜」と大字で記す。扉見返しには枠の中に

光緒 (八年) 壬午歲春正月

金陵王氏雕于東瀛

と記す。まず、光緒辛巳冬月の李頤の序二丁、光緒八年孟夏の王治梅の自序一丁があり、次に王治梅が「写蘭浅説」を述べ、その裏から図解二十一丁が続く。はじめの九丁に、まず蘭の筆順による名称を記し、次に筆の持ち方、描法を図解し、十丁から、例えば師大滌子筆意、露根、舞風というように、作例を図示している。一部は水墨套印。

竹譜の寸法、内枠の大きさは蘭譜と同様である。題簽に

治梅竹譜 壬午孟春
曼壽

とあり、扉に「竹譜」と大字で記す。扉見返しは蘭譜と同じ。まず画竹についての王寅の説明二丁があり、次に図四十丁が続く。図は、はじめの十九丁オモテまでが筆の持ち方、葉の描法の筆順、幹、枯枝、風竹な

どの図解であり、十九丁ウラから、例えば蘇東坡、呉鎮、沈周、李衍など先人の図例と竹図の一般的な例を示す。二十八丁オモテに加島信成の題字「仿古」があり、二十八丁ウラから新梢出牆、清影揺風、柔枝帶雨などの画題を冠した図例を載せる。大半は一頁一図であるが、中に見開きで一図とする例もある。いずれも墨色套印。裏表紙見返しは

明治十五年九月二十日版權免許^{註17}

校正兼 岐阜県士族

出版人 加島信成

大阪西区江戸堀下通一丁目四十一番地寄留

その右横に

東璧山房発兌書目 中華上海法馬路西新橋塊許宅

○治梅蘭竹譜 ○治梅石譜 ○治梅人物冊一略一

とあることから、「歴代名公真蹟縮本」「治梅石譜」と同様に、日本で印刷、日本、中国で発売したものと考えられる。

本書刊行の経緯について、王治梅は自序で、先君静夫公は学問の余暇に絵事を嗜み、もともと写蘭竹石を愛し、晩年には古人の神髄を得るに至った。自分も幼事より父について、学問のかたわら、画学を志し、父の教を拳々服膺した。父は画譜を著わさんと欲しながら、遂に果さずに終わったが、自分はその志をついで、父から伝授された画法、及び古人の真蹟を臨模して、ここに蘭竹譜を編む、と述べている。

その当否は、今、臆測の域を出ないが、明治前期から後期にかけての文人画流行の風潮の中で、「芥子園画伝」その他の画譜とともに、絵画教科書として重宝されたであろうことは間違いない。

なお、古賀氏稿本にいう「治梅梅譜」は光緒十七年（明治二十四年）の

編輯であるから、帰国後、上海で編纂、刊行したものと考えられるが未見である。

次に、挿図に掲げる以外の作品、及び著録に見える作品を挙げておく。なお、先にも述べたが現存作品は多数に上ると推測される。

- 1 雲根図 光緒三年夏四月王治梅并題（林家蔵）
- 2 雲根図 己卯夏四月（光緒五年）
- 3 秋景山水図 光緒七年七夕後三日（大阪市立美術館「近代中国の画家」）
- 4 竹苞松茂図 光緒八年仲秋（定静堂蔵中国明清書画図録）
- 5 江山泛舟図 光緒十年冬十二月中華治梅家（大阪市立美術館「近代中国の画家」）
- 6 鰻魚図（林家蔵）
- 7 水墨壺中九華図 京都 島川清雅堂（南宗画志六号）
- 8 淡彩輕簾出水図 京都・伊藤鶴太郎（南宗画志七号）
- 9 淡彩豆棚茶話図 京都・芝田浅次郎（同右）
- 10 水墨柳陰閑釣図 丹波・岩崎若山（同右）
- 11 水墨白衣大士像 京都・芝田浅次郎（南宗画志八号）
- 12 淡彩太湖靈石図 京都・芝田浅次郎（同右）
- 13 水墨柳陰話古図 京都・石田甚四郎（同右）
- 14 水墨青山白雲図 京都・石田甚四郎（同右）
- 15 水墨雲山烟樹図 双幅 京都・石田甚四郎（南宗画志九号）
- 16 水墨水亭閑話図 長流濯足図（聴雨樓書画録）
- 17 歲朝図（吟香閣叢画）

（八〇・十・三十一）

註

- 1 「美術研究」三一四号所載拙稿「金郊について」
- 2 官職、名は外務省外交史料館蔵「職員並履歴ニ関スル各庁往復書」第一巻による。
- 3 長崎県立長崎図書館蔵。

美術研究所報

美術部・情報資料部公開学術講座

第十五回公開学術講座を昭和五十七年三月六日（土）午後一時三十分～四時三十分、日本経済新聞社小ホールにおいて左記のとおり開催した。

飛鳥・白鳳仏の源流

中国の山水画

久野 健
川上 涇

- 4 言語常將不律通、人情何必判西東、
応酬一卷閑文字、多在焚香読画中。
- 5 其奈留君君不_レ留、一杯緑酒話離愁、
崎陽花月若相憶、又託風帆為_二再遊_一。
長崎県立長崎図書館渡辺文庫蔵。
- 7 明治五年十一月、太政官布告によって、太陽曆を用い、同年十二月三日を明治六年一月一日とすることに定めた。しかし、太陰曆が公式に廃止されたのは、明治四十二年で、それまでは太陰曆が一般に用いられていたから、もし、岡田篁所の五月を太陰曆と考えると、王治梅は五月十三日、長崎を出港して上海に帰り、旬日を経ずして来日したことになる。
- 8 「小方壺齋輿地叢鈔」第十帙五冊所収。
- 9 拙著「近代中国絵画」（角川書店 昭和四十九年刊）所収、図版一九「秋景山水図」
- 10 「黄石齋集」第五集上の評、「湖山曰、治梅画稍可観、詩則拙甚。」
- 11 大阪市立美術館特別展目録「近代中国の画家」第三十二図（昭和四十七年）。
- 12 「宋元明清名画大観」下（大塚巧芸社 昭和六年七月刊）三六九頁。
- 13 宮田安著「唐通事家系論攷」（長崎文献社、昭和五十四年十二月刊）によると鉅鹿家八代。
- 14 同右書、九六五頁。
- 15 顧起元著「客座贅語」卷六、利瑪竇條。
（略）所画天主、乃一小兒、一婦人抱之、曰天母。画以銅板為幀、而塗五采於上、其貌如生。身与臂手、儼然隱起幀上、臉之凹凸处、正視与生人不殊。人間画何以致此。答曰、中国画但画陽不画陰、故看之人面軀正平、無凹凸相。吾国画兼陰与陽写之、故面有高下、而手臂皆輪円耳。凡人之面正迎陽、則皆明而白、若側立則向明一辺者白、其不向明一辺者眼耳鼻口凹处、皆有暗相。吾国之写像者解此法用之、故能使画像与生人亡異也。（略）
- 16 福岡市美術館開館記念展「近代アジアの美術Ⅰ」（昭和五十四年十一月三日～十二月二日）に出品。同展目録に所収。
- 17 九月二十日の左横に「十一月七日」の朱印を押してある。